

飛鳥・藤原宮跡の発掘調査

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

飛鳥藤原宮跡発掘調査部では、1976年度の主要な調査として藤原京内で、朱雀大路、右京七条一坊の調査を行ない、藤原京条坊復原に貴重な資料を得た。また、飛鳥地域では大官大寺の回廊東南隅・寺域東限の調査と、山田寺の中門・塔地域の調査を実施した。主な調査地域とその期間、面積などについては第1表の通りである。

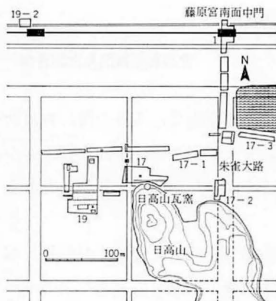
藤原京朱雀大路の調査（第17—2・3次） この調査は、橿原市が日高山の北地区に計画した市営住宅建設に伴う事前調査である。調査地は藤原宮第1次調査で検出した藤原宮南面中門の南100～150mに位置し、朱雀大路推定地にあたる。調査区は日高山の北裾を南地区、そこから北へ50m離れた地区を北地区、北地区の東を東地区とした。今回の調査地の西に接する地域は第17・19次調査として発掘している（第1図）。

検出した主な遺構は朱雀大路とその両側溝および東西溝2である。なお、東地区では朱雀大路の側溝に沿って築地などの検出が期待されたが藤原宮期の遺構はみられなかった。

朱雀大路西側溝S D1952は南地区で検出した。幅4m以上、深さ0.4mを測る。東岸は南端から6mにわたって玉石を3段以上に積み護岸を施している。朱雀大路東側溝S D1951は北地区で検出した。幅4m以上、深さ0.45mを測る素掘りの溝である。両側溝からは藤原宮期の遺物が少量出土した。朱雀大路S F1950は両側溝S D1951・1952に挟まれた空間地に相当し路面幅は18mを測る。側溝はいずれも両岸を検出していないが、東西の側溝とも同規模で溝幅6mとすると両側溝間の心々距離は約24mに復元できる。これらの数値は第18次調査で検出した朱雀大路計画線と仮称している大路や本薬師寺西南隅で検出した八条大路と西三坊大路の側溝心

調査地区	遺跡・調査次数	調査期間	面積	備 考
6 A J H	藤原宮第17—2・3次	76. 4. 5～ 5. 18 10. 12～ 11. 6	9. 0a	朱雀大路
6 A J H	藤原宮第19次	76. 11. 9～77. 2. 11	26. 0a	右京七条一坊
6 A J C	藤原宮第19—1次	76. 5. 25	0. 2a	
6 A J H	藤原宮第19—2次	76. 10. 22～77. 11. 6	2. 0a	
6 A J E	藤原宮第19—3次	76. 8. 26	0. 1a	
6 A J F	藤原宮第19—4次	77. 1. 10～ 1. 11	0. 2a	
6 A J G	藤原宮第19—5次	77. 1. 13	0. 2a	
6 B T K	大官大寺	76. 4. 22～77. 1. 21	17. 0a	東回廊・寺域東限の確認
5 B Y D	山田寺	76. 4. 27～ 12. 18	27. 0a	塔・中門・回廊の確認
6 A M U	埴池北遺跡	76. 5. 13～ 6. 23	11. 0a	
5 B O Q	奥山久米寺西方	76. 8. 23～ 9. 16	0. 7a	
5 A O H	小墾田宮推定地	76. 9. 17～ 10. 4	0. 4a	
5 A I B	稲淵川西遺跡	76. 12. 7～77. 3. 15	7. 2a	
5 B A S	飛鳥寺	77. 3. ～		北面大垣・北門

第1表 1976年度発掘調査状況



第1図 第17・19次発掘位置図

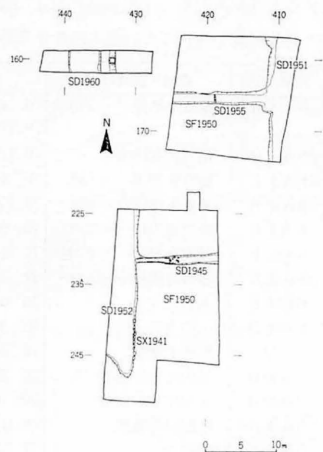
心距離約16mよりも広く、藤原京の中央大路としての性格の一端を窺うことができる。

朱雀大路SF1950上では東西溝2条を検出した。南地区で検出した東西溝SD1945は幅1.4m、深さ0.6mを測り、東端は西側溝SD1952に合流する。合流点から東へ6mの位置に暗渠の一部と考えられる玉石組みの施設が残っている。朱雀大路の両側溝を結んで排水するためのものであろう。この溝の位置は七条条間小路北側溝の推定位置よりも北にずれるため、小路側溝とするには問題が残る。北地区で検出した東西溝SD1955は幅1.5m、深さ0.45mを測る。この溝はSD1951の西岸から西へ7mの位置に建築部材を転用加工した木堰を設けている。木堰の東では木杭に小枝をからませた「しがらみ」による護岸施設がみられる。SD1955はSD1951の掘削時よりも古く掘られている。

今回検出した朱雀大路の中軸線は藤原宮中軸線の延長線とほぼ合致している。また、藤原宮北面中門地区(第18次調査)で検出した朱雀大路計画線と仮称したSF1920の延長部はこの調査区内では検出していない。さらに、朱雀大路の西側溝SD1952は日高山の北裾にあたる位置で終わっている。側溝は日高山の山腹まで延びていたのが後世に削平されてしまったものか、あるいは朱雀大路の側溝を掘削した当初からこの位置で止まっていたのかは明らかでない。朱雀大路に限らず、藤原京の大路や小路が丘陵にあたる場合、その処理の仕方が問題として残る。

藤原京右京七条一坊の調査(第19次) この調査は橿原市が上飛野町に計画した宅地造成に伴う事前調査である。調査地は日高山の西に接する水田で、藤原京右京七条一坊の推定地にあたる。藤原京の坊の坪割については、最近の発掘調査の成果から、東西、南北ともに坊の中央に1条の小路を設けて4つの坪に分けていることが明らかになっている。かりに平城京の坪割と同じ方法で呼ぶとすれば、今回の調査地は右京七条一坊三坪と四坪にあたる(第3図)。

検出した遺構は、その重複関係や出土した遺物からみて、藤原宮造営前のもの(A期)、藤原宮期のもの(B期)、中世以降のものがある。A・B期の遺構は掘立柱建物13、道路1、掘立柱塀6、井戸1、溝3、土坑20である(第2表)。

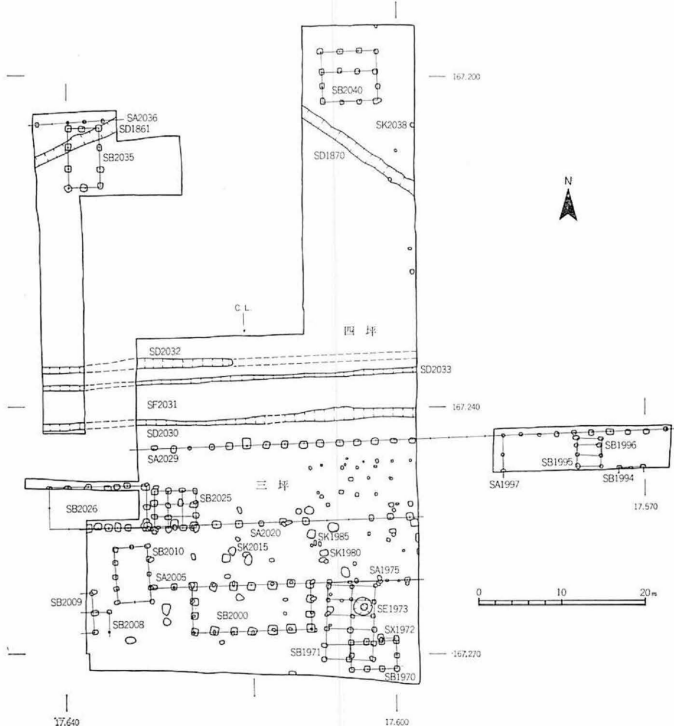


第2図 第17—2・3次発掘遺構図

飛鳥・藤原宮跡の発掘調査

時期	遺構	規模	時期	遺構	規模
A1期	S B 1971	南北棟 5間×2間 9.0×6.0	B1期	S B 1970	東西棟 3間×2間 5.4×3.3
	S B 1996	東西棟 1間×1間 3.0×2.0		S B 1994	南北棟 ? 間×2間 ? ×3.0
	S B 1995	東西棟 1間×1間 2.9×2.7		S B 2000	東西棟 6間×3間 14.4×5.7
	S B 2008	? ? ?		S A 2029	東西塀 28間 62.5
	S B 2009	東西棟 ? ×2間 ? ×4.8		S A 1975	東西塀 4間 9.6
A2期	S B 2010	南北棟 4間×2間 6.8×4.0		S A 2005	東西塀 2間 5.9
	S B 2026	東西棟 5間×2間 11.6×5.0		S A 2020	東西塀 14間 38.0
	S A 2036	東西塀 4間 8.0		S A 1997	南北塀 2間 4.4
	S D 2033	東西溝		S E 1973	井戸
	S F 2031	七条条間小路		S B 2035	南北棟 3間×2間 7.2×3.8
B1期	S D 2030	七条条間小路南側溝	B2期	S B 2040	東西棟 3間×3間 6.9×6.0
	S D 2032	七条条間小路北側溝		S B 2025	東西棟 3間×3間 5.1×4.5

第2表 第19次発掘遺構時期区分



第3図 第19次発掘遺構図

A期の遺構には建物6, 溝1, 堀1があり, ほかに自然流路SD1861・1870がある。建物については, 藤原宮第16次調査ですでに明らかにされているように(『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』6参照), 重複関係や建物の方位の違いを手がかりにA期をA₁・A₂期に細分できる。A₁期は7世紀後半をそれほど遡らない時期, A₂期は藤原京条坊施行直前の時期をあてることができる。

A₁期の遺構は建物SB1971・1996がある。いずれも国土方眼北に対し北で東へ振れる方位を示す。SB1971の南北の妻柱穴および棟通りの北から3番目の柱穴は玉石を5～6個用いて根固めを施している。

A₂期の遺構には建物SB1995・2008・2009・2010・2026と堀SA2036, 東西溝SD2033がある。いずれも国土方眼北に対し, 北で西へ振れる方位を示す。建物はSD2033の南に集中している。SB2026は桁行11.6m, 梁行5mを測り, この時期では最大規模の建物である。この建物は柱を建てる際, 柱掘形の底を一段掘り凹め, その部分に石を据えて根固めとし, 石の上に柱を建てている。溝SD2033は幅0.45～0.6m, 深さ0.2～0.4mを測る素掘りの溝である。

B期の遺構には東西道路とそれより南では建物3, 堀5, 井戸1, 土壇19があり, 北では建物2, 土壇1がある。道路SF2031は北側溝SD2032と南側溝SD2031を伴い, 路面幅約6m, 側溝心々距離約7mを測る。北側溝SD2032は幅1.2m, 深さ0.2mの素掘りの溝で, 調査区中央付近から東は削平されている。南側溝SD2030は幅0.75～1.45m, 深さ0.25m前後の素掘りの溝で, 堆積土からは, 木簡, 軒平瓦, 土師器が出土した。道路SF2031の位置は他の条坊遺構から推して, 七条条間小路と考えられる。なお, SF2031は西で南に約2°振れている。

条間小路SF2031より南の三坪の遺構は重複関係からB₁・B₂期に細分できる。

B₁期ではSF2031の南側溝SD2030の心から南へ3mの位置に東西の掘立柱堀SA2029を設け, 小路との間を画している。さらにSA2029から南約9mの位置に東西方向の堀SA2020がある。B₁期の主要遺構はSA2020の南で検出した。建物SB2000は今回の調査範囲内では最大規模の建物であり, 北側柱列の東と西には東西方向の堀SA1975とSA2005がとりつく。この建物を東西に二分する中軸線は, ほかの条坊遺構から推定される三坪の中軸線とほぼ一致している。SB2000の東では小規模な建物SB1970や井戸SE1973を検出した。

B₂期になるとSB2000, SB1970, SA2020は取りはらわれ, SB2025, SX1972が造られる。B期ではほかにSB2000の北方を中心に分布する多数の土壇がある。土壇の中に焼土, 灰を多量に含むものが多く, SK2015からは埴仏の範が出土した。

条間小路SF2031以北の四坪の遺構としては建物SB2035・2040と瓦溜りSK2038がある。SB2040は北に広庭をもつ建物である。四坪は三坪と比較して遺構は少なく, 三坪でみられたSA2029のように坪の南を画する施設はない。四坪の東部についてはすでに第17次調査で発掘し, 一坊坊間小路との間を画すると考えられる南北方向の堀SA1855を検出している。

出土遺物には埴仏範, 墨痕の残る木簡2と少量の土器・瓦がある。埴仏範は雄型に粘土を押し焼成したもので, 左下半部を残し, 現存幅9cm, 高さ6.5cmを測り, 大小の蓮華座と2体の

立像の下半身が残る。復原すると、中央に如来立像を配し、左右に脇侍菩薩立像を置く形式となる。この範から製作した埴仏は現在のところ知られていない。

今回藤原京の坊内を大規模に調査したことにより、藤原京における坪の実態をつかむ手がかりを得た。三坪の場合、坪の北半部を調査したのみであるが、坪の中をさらに細分する施設は検出していない。B₁期では、坪の北部で坪を東西に二分する中軸線上に大規模な建物を建て、周辺に小規模な建物や井戸を配置する宅地利用法の一つを明らかにした。坪全体を一つの宅地として使用していたものであれば、さらにS B2000の南に主屋風の建物の存在が考えられる。七条条間小路についてはこれを東に延長すると日高山にあたる。朱雀大路と日高山との関係と同様に、道路が丘陵にあたる場合、その処理の仕方が問題である。第17次調査では、今回検出の七条条間小路の東延長上よりやや北に寄って東西溝S D1845を検出している。丘陵にあたる部分では、小路を北に迂回させていた可能性も考えられる。

藤原宮出土木簡 木簡は藤原宮東辺外濠S D170から37点と、藤原宮南辺内濠S D502から56点出土した。

東辺外濠S D170は、第19—1次調査として藤原宮東北隅から南へ約650mの地点を発掘し、幅5.3m、深さ0.7mの外濠を長さ1mにわたって検出した。発掘面積が小さいにもかかわらず、37点の木簡が出土したのはS D170が含んでいる木簡の多さを改めて確認することとなった。木簡は削り屑が多く釈読できるものは少ない。木簡の中で顕著なものとしては次がある。

(表)

□	□	春部己西部丸部	□	□	人
春	□	□	□	□	

 (裏)

□	□	□	□
□	人	人	阿□□

短冊形の木簡全面に習書として書かれたものである。その習書中に春部・己西部・丸部等の氏の名を記したものがある。また、削り屑の中にも習書で己西部と記したものもあり、木簡はこの習書木簡と、それと同類の木簡の削り屑とを一括して外濠に投棄したことを想像させる。なお、S D170はこれまでに奈良県教育委員会がその北端部分を調査し、当研究所では昭和50年度に今回調査地の北約90mの地点を発掘しており、いずれも木簡の出土をみている。

南辺内濠S D502は第19—2次調査として藤原宮南面中門の西約280mの地点を発掘した。調査地の東南隣接地は藤原宮南面西門の推定地である。S D502はすでに第1次調査で検出したものの西延長部にあたり、今回は幅2.1~2.6m、深さ1mを測る素掘りの溝を長さ14mにわたって検出した。出土した木簡は56点で、そのうち釈読できるものは9点である。とくに内容上注目されるものとしては次の2点がある。1「

□	□	□	□	自女	卅	舟木若子	女	直在	槐
---	---	---	---	----	---	------	---	----	---

」
2 (表)「但鮭者速欲等云□□」 (裏)「以上博士御前白 宮守官」 1は女性の名前と年齢等を書きあげた交名風の木簡で、婢、女丁、ないし縫女等藤原宮内で官衙の雑役等に従事した女性に関するものと思われる。2は宮守官が博士に対して報告している文書で、宮守官という官名は令文その他の文献史料にはみられず注目される。博士については大宝令制では大学博士、陰陽博士、医博士等があるが、どの博士にあたるものかは詳かにしない。なお、第1次調

査でもSD502から木簡が出土している。

大官大寺第3次調査 南面東回廊・東面回廊、寺域東限、中ツ道の検出およびそれら相互の関連の追求を目的として調査を実施した。主な検出遺構には、回廊、掘立柱建物、塀、溝、土坑などがある（第4図）。

回廊は南面東回廊SC053を7間分、東面回廊SC051を4間分検出した。回廊東南隅は中門取り付き部から15間目にあたる。礎石はすべて原位置に据えられたまま残っており、桁行3.9m（13尺）、梁行4.2m（14尺）である。脇門は検出されなかった。基壇の築成にあたっては掘込地業は行わず、整地面上に直接積土している。基壇外装や雨落溝はみられずかえって基壇面が堅く焼けてしまひ、その上面に垂木や屋根の裏板とみられる焼損材が遺存していた。中門と同様に未完のうちに火災にあった状況が窺えた。礎石は花崗岩製で、基壇土を積み前に据え付けている。回廊東南隅を検出したことにより、回廊の全規模の復原が可能になった。中門心から回廊東南隅柱位置までは71.8mとなり、回廊の東西総長は両端隅柱位置間で143.6mに復原できる。中門の東妻柱位置から回廊東南隅柱位置までは60mあり、200尺で設計されたと考えられる。南面東回廊の方位は真東西にはほぼ一致し、既知の伽藍中軸線とは正確には直交しない。

回廊の規模を明らかにし得たので、寺域東限施設を発見すべく、発掘区を東に長く延長したが、築地など寺域の東を限る施設は全く認められなかった。しかし、SX240を境にしてその東西では遺構の分布、瓦の出土状況に顕著な違いがあり注目された。SX240は南北溝SD250Bと南北溝SD244とにはさまれた幅20mほどの地山の高まりである。SD250Bは幅5mほどの素掘りの溝で、大官大寺造営以前につくられ、大官大寺式の軒平瓦6661型式やフィゴの羽口、鉄滓を含む土で埋められている。SD244は中世の素掘りの溝である。SX240の位置は大官大寺伽藍中軸線から東へ約130mで、「中ツ道」の推定位置にあたる。SX240は中ツ道の可能性があるが、SD244は中世の溝であり、発掘範囲も狭く、その性格については即断を避けたい。SX240上には土坑SK245が設けられている。SK245からは手斧の削り屑、土器、瓦とともに木簡7点が出土した。木簡では「讃用郡驛里鉄十連」と書かれた播磨国からの貢進物付札が注目される。「郡」と里名の一字表記より、大宝から和銅初年にかけての年代が考えら

第4図 大官大寺第3次発掘遺構図

れる。S X240以西には、大官大寺造営期の南北溝 S D260・255がある。溝内からは手斧の削り屑、瓦、土器が出土している。その他、造営中に出た廃材や焼亡後の焼土・炭化物・瓦などを捨てた土坑 S K253などがある。S X240以東では掘立柱建物3、掘立柱の堀1、土坑、溝などを検出した。いずれも7世紀中頃の遺構で、S X240以東からはほとんど瓦が出土しなかった。

以上のように、大官大寺の関連遺構や瓦の出土はS X240以西に集中することが明らかになった。寺域の東限を示す施設は確認できなかったが、S X240付近が寺域東限として意識されていたことを暗示する。「中ツ道」を利用して設定された藤原京東京極路との関連を含めて、今後の調査の進展に期待するところが大きい。

山田寺第1次調査 桜井市山田に所在する山田寺は、古くより四天王寺式伽藍配置をもつ寺院として知られている。塔・金堂・講堂跡の土壇や礎石がよく残っており、昭和27年には特別史跡に指定された。昭和50年3月から史跡指定地の国有化が進み、昭和51年度を初年度として史跡整備のため伽藍中心部を調査することとなった。今回はその第1次調査として塔を中心に中門、回廊推定地を含む約2700㎡を調査し、塔・中門、中門より塔に至る参道、および西回廊の一部を明らかにすることができた。

塔 S B005の基壇は一辺約12.6m (42尺) で、四辺の中央に各々幅3mの階段があり、四周を犬走りがめぐる。基壇には心礎と西北隅の四天柱の礎石が原位置をとどめていた。旧地表面から四天柱礎石上面までの高さは約1.8mである。礎石および礎石据え付け跡から復原すると、塔の平面規模は方3間、柱間は中央間が8尺、脇間は7尺もしくは8尺と推定される。したがって、一辺22尺もしくは24尺の塔ということになる。基壇規模などからみて『諸寺縁起集』の

第5図 山田寺第1次発掘遺構図

記述のように五重塔であろう。なお、塔中軸線は方眼北に対して北で西に約 $1^{\circ}30'$ 振れている。

心礎は基壇上面から地下1mにある。南北径1.72m、東西復原径1.8mの不整形な花崗岩で、上面中央に二段に舍利孔を穿つ。上段の蓋を受ける部分は直径30cm、深さ3cm、下段の直径は23cm、深さ15cmであり、底は碗状を呈する。内面にはベンガラとおぼしき赤色顔料が付着していたが、蓋や舍利容器はすでに持ち去られていた。なお、心礎下面にも直径約1mの円柱座を確認したが、この柱座はノミの痕跡を留め荒仕上げの段階で放置されている。原位置に残る西北隅の四天柱礎石は長径1.62m、短径1.2m、厚さ0.58mの安山岩製で上面に径1mの円柱座を作り出している。なお、発掘以前から心礎位置に露出していた花崗岩製の礎石は、従来心礎かと疑われていたが、心礎の検出により二次的に動かされたものであることが判明した。この礎石の上面にも径1mの円柱座があり、四天柱礎石を後世に転がしたものと考えられる。

塔基壇の築成にあたっては、まず、基壇規模よりやや大きく南北15m、東西16mの範囲を深さ1mまで掘り下げ、「掘込地業」を行なっている。底面に礫を置き、底から約1.6mの高さまで版築をした時点で、心礎据え付け穴を掘り、心礎を据え付ける。心礎を据えた後で基壇上部の築成を行なうが、この時にはすでに心柱が建っていたらしく、心柱周囲の根巻粘土と基壇築成土が互層になっていることが観察された。基壇は羽目石、葛石が全て抜き取られて、花崗岩の地覆石の一部が残るのみであったが、基壇周辺からは加工痕のある凝灰岩切石が多数出土した。このことから基壇は地覆石は花崗岩、羽目石・葛石に凝灰岩切石を用いた壇上積み基壇と推定される。階段はいずれも幅3m、出1.5mを測る。石階部分は全て破壊されてその構造は明らかでない。階段の基部は塔の基壇土を削り出して作り、部分的には塔の基壇土を削り取り、新たに黄褐色粘土を突き固めて構築している。

基壇周辺の犬走りは基壇から1.5m離れた位置に縁石として砂岩系の暗緑色の石を並べ、縁石と基壇との間には同質で、やや小さ目の石を敷きつめる。当初の犬走りは方形にすることを意識し、階段位置では地覆の線に揃えているが、後に階段部分に幅5m、奥行1mほどの張り出し部を設ける。この改裝時期は、後述するように境内を瓦敷にした奈良時代中頃と思われる。塔周辺では瓦敷を検出した。塔周辺を中心とし、発掘区東北隅にも広がっているが、一部に欠けた部分がある。瓦敷に使用された瓦は平瓦が最も多く、他に丸瓦・鷗尾・軒瓦・垂木先瓦・熨斗瓦・須恵器の大甕などがある。また、塔の東約14mの瓦敷の中には、直径30cm、高さ24cmの円筒土管を半分埋め込んだ施設が発見された。瓦敷にした時期は、瓦敷に混って出土した土器からみて塔創建当初ではなく、奈良時代中頃と考えられる。

瓦敷の上にはバラス敷がある。この中からは10世紀の土器片が出土しており、平安時代になってバラス敷にしたものと推定される。発掘区の東辺のバラス敷上からは東回廊のものと思われる垂木や茅負などの建築部材が出土しており、東回廊は10世紀頃に倒壊したものと考えられる。このバラス敷の上層には焼土層がある。焼土層は塔周辺で厚くなっており、中からは焼けた瓦・埴土と共に12～13世紀の瓦器が出土した。塔は12～13世紀頃焼失したものとみられる。

参道 S X 004 は塔の南正面と中門との間を結ぶもので、長さ約 6 m にわたって検出した。幅 1.5 m で、縁石として花崗岩を並べ内部に瓦を敷いている。当初は縁石のみの参道で、後に瓦敷としたものであろう。

中門 S B 003 は基壇土の一部と中門を建てる時の足場穴 S X 013 を桁行 4 間、梁行 1 間分検出した。柱間は 14 尺前後である。後述する西回廊との関係を考慮して、この足場穴から中門を復原すると、柱間は 14 尺前後で、桁行・梁行とも 3 間の重層門と考えられる。中門心から塔心までの距離は約 29 m である。中門と塔の間では現状で約 1 m の高低差があり、もとはこの間に階段状の施設があったと推定されるが、すでにこの部分は削平されてその痕跡をとどめない。

西回廊 S C 070 は礎石抜取穴 4 個を検出した。これによって西回廊は桁行柱間 3.6 m (12 尺) 梁行 4.2 m (14 尺) の単廊と復原できる。塔を南北に二分する中軸線は復原西回廊の南端から 9 間目の心と一致する。先の中門の復原と合わせると、中門以西の南面回廊部分は 10 間になる。塔心から西回廊心までは 40.4 m で、これを東に折りかえすと 80.8 m で、東回廊の推定位置は現在の里道の東にあたる。

このほかのおもな遺構としては土壇 2、井戸 5 がある。土壇 S K 006 は南北 9 m、東西 16 m、深さ 1.1 m を測る不整形の土壇で、7 世紀後半の土器とともに多量の瓦、甕の羽口、鉄釘が出土した。土壇 S K 201 は中世の瓦溜りで瓦とともに瓦器が出土した。井戸 5 基はいずれも中世のものである。S E 230・231・233・234 は石組み井戸である。S E 232 には井戸枠等は残っていない。井戸のうち S E 230・231 から 13 世紀前半の瓦器が出土した。

遺物には瓦埴類、埴仏、金属製品、木製品、土器がある。なかでも瓦は大量に出土した。数千点出土した軒瓦のうち、奈良時代のものは 10 点に満たず、他はすべて単弁 8 弁蓮華文軒丸瓦と重弧文の軒平瓦の組み合わせからなるいわゆる「山田寺式」であるが、従来、山田寺出土と伝えられている花卉中の子葉のまわりに火焰文をめぐるす軒丸瓦は出土しなかった。

埴仏は独尊、四尊連座、十二尊連座のものがある。独尊埴仏は一辺約 3 cm の方形で最も小型である。四尊連座埴仏は如来座像を横 2 列 2 段に配し、十二尊連座埴仏は 4 列 3 段に配している(口絵 10)。埴仏の中には金箔の痕跡の残るものがある。この他に大型の独尊座像埴仏の脚部片が出土した。

金属製品のうち注目すべきものに金銅製の風招がある。風招は下端に双円弧状のくり込みをもつ(第 6 図左)。このような形態は長谷寺の銅板法華説相図の多宝塔の初層の軒先にみられる風招と同じものである。昭和 31 年度に調査した飛鳥寺瓦窯跡

第 6 図 山田寺出土の風招と飛鳥寺瓦窯出土の瓦篋描

出土の平瓦にも、これとよく似た風招が線書されている（第6図右）。奈良時代に先行する型式のものと考えられる。

今回の調査によって、塔の規模・中門および回廊の位置をほぼ明らかにすることができた。最後に、塔・中門・回廊の造営・廃絶年代についてふれておく。山田寺の建立は『上宮聖徳法王帝説』裏書によると、舒明天皇13年（641）より始まっている。塔周辺が偉容を整えた時期を知る手がかりとして、伽藍造営時の廃棄物を一括して捨てたと考えられる土坑SK006の出土土器がある。SK006出土土器は7世紀の第IV四半期に位置づけられるものであり、この年代は『上宮聖徳法王帝説』裏書にある塔建立年代とも矛盾しない。塔の焼失時期は12～13世紀頃と考えられるが、10世紀頃には東回廊の一部はすでに倒壊していたらしく、さらに、13世紀前半には回廊内の各所に井戸が掘られるほど荒廃していたらしい。

飛鳥寺北方の調査 住宅建設に伴う事前調査として実施したものである。調査地は飛鳥寺安居院の北方約220m、字石神の東方約150mの水田である。検出した遺構には掘立柱の塀と溝及び建物の一部とみられる柱穴などがある。東西方向の一本柱の塀SA500は柱間2.7m等間で6間分検出した。真北に対して東で1°弱北に振れる。塀の北に沿って幅約2.4m、深さ約1.0mの東西溝SD501があり、溝は発掘区の西端で止る。塀と溝の心々距離は2.4mを測る。溝内や付近には石塊が散乱しており、溝は玉石で護岸していた可能性が強い。埋土からは炭化物に混って多量の瓦・土器が出土した。軒丸瓦では飛鳥寺創建瓦と推定される単弁10弁蓮華文軒丸瓦のうち中房周縁の圈線が突出するものが、出土軒丸瓦の70%近くを占めている。また、土器の大部分は奈良時代後半に属する。その他の遺構としては、塀SA500の南9mにある幅約2mの東西溝SD503および南17m付近に点在する柱穴群があるが、発掘区が狭く詳細は不明である。

以上のように、東西方向に走る一本柱の塀SA500とそれに伴う溝SD501は、位置と出土遺物からみて飛鳥寺の北を画する施設の可能性が強い。飛鳥寺南門と塀SA500との心々距離は約293mを測り、寺域はこれまで想定されてきた北限よりも約1町北へ拡がる可能性がある。なお、溝が塀に沿ってそのまま西に延びず途中で止まり、基壇状の高まりが北に突出する位置は、従来推定されてきた寺域の中軸線の北延長線上にあたり、この高まりSX502が塀に取り付く門など建物の基壇跡の可能性も残されている。

稲淵川西遺跡の調査 この調査は飛鳥国営公園祝戸地区の駐車場建設に伴う事前調査として実施したものである。調査地は坂田寺跡の西方約200m、

第7図 飛鳥寺北面大垣発掘遺構図

稲淵川を隔てた水田中にあり、北を通称「フグリ山」の山塊に画された南北に細長い平坦地である。

検出した主要な遺構は掘立柱建物4と石敷広場1である。S B001は桁行5間以上、梁行4間の四面廂付と推定される東西棟掘立柱建物である。柱掘形は幅1m、長さ3.2m前後の長方形平面で、側柱と入側柱を一組にして一つの掘形内に2本の柱を立てる特異なものである。S B001の北および東側柱外方に接して厚さ1cm、長さ1mほどの板材を横長に立て並べた施設を検出したが、その性格は判然としない。S B002は桁行8間以上、梁行4間で南側に廂を持つ東西棟掘立柱建物である。柱掘形は2種類あり、南側柱列は通有の形態であるが、入側柱列は溝状

第8図 稲淵川西遺跡発掘遺構図

に穿った一連の掘形（布掘り掘形）に9本以上の柱を立てる形態を取る。北側柱列も同様に布掘り掘形であろう。S B003は桁行2間以上、梁行4間で西に廂を持つ南北棟掘立柱建物で、入側柱列および東側柱列を布掘り掘形としている。S B004は桁行15間、梁行4間で、総長26.4mに及ぶ細長い南北棟掘立柱建物である。S B003と柱間寸法、柱掘形状況、廂の付き方など全く同様である。

S H010は発掘区の中央で検出した南北14m、東西18m以上の石敷広場である。北は高さ15cm前後の石列で限り、S B002の南側柱列に接する。南はS B001の北に接する先述の板材で画し、東はS B004西側柱列付近まで及び、西は発掘区外に拡がる。石敷は40cm前後の花崗岩質の玉石を全面に敷きつめているが、一部は石が抜取られている。敷石上や目地にはかなりの量の炭化物が認められた。

石敷広場と4棟の建物は同じ整地土上にあり、同一時期の造営による一連の遺構である。これらの遺構の方位は国土方眼方位に対して北で25.5°東に振れる。稲淵川と「フグリ山」とにはさまれた遺跡地の現地形は遺構方位とはほぼ一致する方向に細長い平坦地であり、遺構方位は地形に制約されたのであろう。

出土遺物の大部分は土師器・須恵器などの土器類で、瓦類・金属器などは少量である。柱掘形や整地土中からは7世紀中頃の土器が出土し、遺構を覆う黄色粘質土や柱抜取痕跡および石

敷上の炭化物層からは7世紀末年前後の土器が出土した。

以下、本調査で判明した二、三の事項について記述する。まず、遺構配置の整然とした規格性が注目される。S B001とS B002の東側柱列が一致すること、S B003とS B004の柱筋が一致すること、S B001の妻柱の位置がS B003とS B004の中央に一致すること、S B001・002とS B003・004の建物間距離がS B003とS B004間のそれに一致することなど、多くの点で建物の配置の計画性を窺うことができる。また、S B001・002は西半部が未調査であるが、両者の桁行総長は一致するものと予想され、9間と14間に復原できる。周辺の地形を考慮すれば、S B001・002の西方にS B003・004と同様な建物を想定することもさほど困難でない。もしそうであれば、S B001を中心とした東西対称の建物配置となる。このような建物配置や、飛鳥板蓋宮伝承地や宮滝遺跡と同様に建物間に石敷広場を設けること、瓦を伴わないことなどから、本遺跡はコンパクトにまとめられた宮殿跡の色彩が濃厚である。その年代は出土遺物によって7世紀中頃に造営され、7世紀末前後に廃絶したものと推定される。検出遺構に重複はみられず、建替えなどは行なわれないまま比較的短期間のうちにその役割を終えたい。廃絶の事情は明らかでないが、敷石上の炭化物の堆積からみれば、罹災した可能性も考えられる。

造営尺については1尺 \approx 0.2933mとすると、建物総長や柱間寸法に完数が得られ、最も矛盾が少ない。古代の造営尺については一般的に言って1尺は0.295mより大きい数値を示すが、本遺跡の造営尺は藤原宮造営尺(1尺=0.294m)や前期難波宮造営尺(1尺=0.292m)に近く注目される。

また、今回の調査では、一連の柱掘形に複数の柱を立てるという特異な工法を認めることができた。この種の類例として前期難波宮跡の内裏東方にある門(第20次調査のS B2001)がある。本遺跡と年代が近く、興味深い問題といえよう。

以上のように7世紀中頃に造営された宮殿跡とすると、当然文献にみられる「宮」との関連が問題になるが、現状では「飛鳥河辺行宮」をその候補の一つとして指摘するにとどめ、今後の検討をまちたい。

第9図 稲淵川西遺跡遺構模式図

(川越 俊一・岩本 正二)